



Title	換喩もどきの指示性について
Author(s)	大田垣, 仁
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 169-182
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/70928">https://hdl.handle.net/11094/70928</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 換喩もどきの指示性について

大 田 垣 仁

## 1. はじめに

これまでひとしなみに「換喩」(メトニミー、metonymy)とみなされてきた言語現象がある(e.g.「ヤカンが沸騰している」「漱石をよむ」「鍋をたべる」<sup>(1)</sup>、etc.)。換喩成立の動機づけについては、近年認知言語学の観点(とりわけ日本国内では西村2004、2008、西村・野矢2013)によって考察がおこなわれている。筆者が依拠するメンタル・スペース理論(Fauconnier 1985、1997)も認知言語学の方法論に属する理論ではあるが、メンタル・スペース理論による厳密な名詞句解釈のとらえかたから換喩の成立メカニズムを再検討したばあい、西村が提案する領域焦点化モデルは換喩の外延をいたずらにひろげすぎていることがわかる。その理由として、名詞の「指示」に対するとらえかたが、メンタル・スペース的なみかたと領域焦点化モデルとではことなっていることが考えられる。そこで、本稿ではまず、これまで換喩とよばれてきた言語現象の記述的な観察をおこない、そこからみだされる類型が「兼用表現」がつかえるものとつかえないものとわかれることをのべる。次に、この兼用表現の成立可否が、言語現象の概念レベルでの成立メカニズムがことなっていることをしめしているということを指摘する。そして、この2大別のひとつが、語用論的コネクターによって二段階の指示がおこなわれる、メンタル・スペース理論からいって純粋な換喩であり、もうひとつは一見換喩のようにみえるが換喩がおこなう二段階の指示をおこなわない「換喩もどき」であることをのべる。その根拠として、この成立メカニズムのちがいが、名詞句に対する述語のかかりかたのちがい、疑問詞疑問文のふるまいのちがい、カラ格をもちいたテスト(三宅 1996)といった他の言語現象にもあらわれることを述べる。

## 2. 言語現象の記述的観察

典型的な換喩は「部分で全体」「作家で作品」「組織で責任者」「容器で中身」といった、換喩を生じさせる関係のリストとしてしめされてきた(Lakoff and Johnson 1980、佐藤1978、瀬戸1997)。これまでに言及されてきた換喩を生じさせ

る関係のリストを筆者の調査をもとに整理すると、次のようなものが考えられる。

- (1) 所有物で所有者／構造物の構成部分で構造物本体／出来事の構成要素でその出来事／場面を共有する物や場所でその対応物／全体で部分／入れ物で中身（とその拡張）／組織で責任者（とその類例）／作家で作品（とその類例）／支配者で被支配者

それぞれに該当する例を以下に示す。

所有物で所有者

- (2) a. 正午ちかく、警察のひとが二人、葉藏を見舞つた。（……）ひとりは短い口鬚を生やし、ひとりは鐵縁の眼鏡を掛けてゐた。鬚は、聲をひくくして園とのいきさつを尋ねた。（道化の華）

- b. 例の眼鏡が（……）黒板の字を凝視している。（若き数学者のアメリカ）

構造物の構成部分で構造物本体

- (3) a. 道内各地に建つ三角屋根を觀て廻ると、空家となっているものが散見される。（日本の佇まい）

- b. 絨毯の部分が多いのであれば、紙パック（＝紙パック式の掃除機）の方が良いかもしれません。（教えて！ goo）

出来事の構成要素でその出来事

- (4) a. ファンドが姉齒（＝2005年におきた姉齒元建築士による耐震偽装事件）に怯える理由（日経ビジネスオンライン：2006年10月5日）

- b. 天麩羅蕎麦（＝天麩羅蕎麦をたべた坊っちゃんが生徒に馬鹿にされた事件）もうちへ帰って、一晚寝たらそんなに癩癩に障らなくなった。（坊っちゃん）

場面を共有する物や場所でその対応物

- (5) a. 14卓さんおかえりです。（筆者が実際にいった飲食店にて）

- b. かつどんが食い逃げをした。（田窪 1992：30）

全体で部分

- (6) a. 両手を頭の下で組み、仰向けに寝て、自転車をこぐように足を回す。（生島ヒロシの50歳からの健康上手）

- b. 三原は、すぐに電話をとって、上野の車掌区を呼び出した。（点と線）

入れ物で中身（とその拡張）

- (7) a. 入れ物で中身：鍋を煮立たせて、ゆでだこを売っている男がいました。（先生への通信）

- b. 京都市、26万人に避難指示 台風で桂川が氾濫（日本経済新聞：2013年9月16日）

組織で責任者（とその類例）

- (8) a. 農林水産省と厚生労働省は26日、未通関の米産牛肉の輸入手続きを27日に再開することを正式発表した。（日本経済新聞：2006年10月26日）  
b. 村は寒気の底へ寝静まっていた。（雪国）

作家で作品（とその類例）

- (9) a. 布団にもぐりこみ（……）夏目漱石を読んだ。（太陽の塔）  
b. やはり、サントリイに限る、サントリイを飲むと、他の酒はまずくて飲まれん、（……）（春の枯葉）

支配者で被支配者

- (10) a. ブッシュがイラクを爆撃した。（Lakoff and Johnson 1980をもとに作例）  
b. 本願寺第十五世常如宗主のとき、浪華の門徒高木宗賢が浄財を喜捨して（……）本学を建てた。（金閣寺）

さて、これらの類型にあてはまる言語表現はこれまでひとしなみに換喩とみなされてきたが、いくつかのテストフレームを適用させることで言語記号としてのちがいをみせる（大田垣 2011を参照）。そのテストフレームのなかでも特に、兼用表現によるテストをおこなうことで、これまで換喩とみなされてきた表現は兼用表現がつかえるものとつかえないものとして、おおきくふたつにわけることができる（ただし、「作家で作品をあらわす」類型と「支配者で被支配者をあらわす」類型は成立メカニズムに複雑な部分があるため、5節で考察する）。兼用表現には、おおきくわけてふたつのあらわれかたがある。すなわち、次のような、同一の名詞を複数の述語で兼用する方法と、

- (11) その学校は岡の上に松林に囲まれて建っていてふだんは午前8時にはじまる。  
次のような、同一の名詞に対し連体修飾表現と述語をくみあわせてもちいる方法である。

- (12) 岡の上に松林に囲まれて建っている学校はふだんは午前8時にはじまる。  
本稿の分析では、後者の兼用表現を分析にもちいる。このテストフレームをもちいると、上にあげた表現は、兼用表現がつかえるものとつかえないものとにわかれる。まず、「全体で部分」「入れ物で中身」「組織で責任者（とその類例）」では、換喩によってあらわすものとあらわされるものとの両方に言及するような兼用表現をつかうことができる。

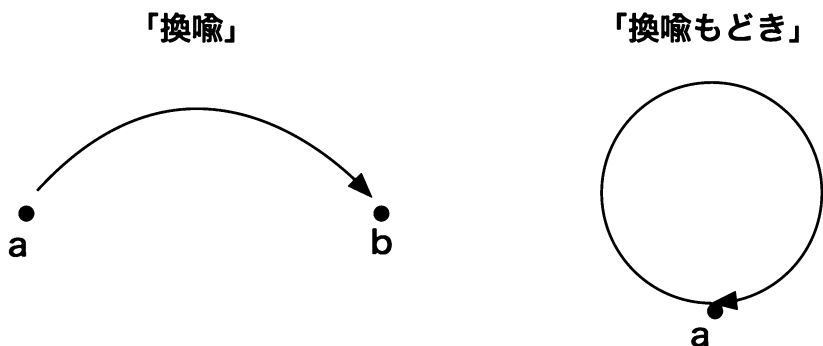
- (13) a. 全体で部分：赤い自転車をこぐ。／机のうえでなっている電話をとる。  
b. 入れ物で中身：銅でできた鍋を煮たさせる／渡月橋がかかる桂川が氾濫する。

- c. 組織で責任者（とその類例）：霞ヶ関にある厚生労働省が米産牛肉の輸入再開を発表した。／あとにした村は寒気の底に寝静まっていた。

一方、「所有物で所有者」「構造物の構成部分で構造物本体」「出来事の構成要素でその出来事」「出来事の構成要素でその出来事」の例では換喩によってあらわすものとあらわされるものとの両方に言及するような兼用表現をつかうことができない。

- (14) a. 所有物で所有者：\*声をひくくして園とのいきさつをたずねた髭をそった。  
／\*黒板を凝視している眼鏡をふいた。
- b. 構造物の構成部分で構造物本体：\*ひっこしたばかりの三角屋根が台風でとばされた。／\*量販店でサイクロンにするかでまよってかった紙パックをくしゃくしゃにした。
- c. 出来事の構成要素でその出来事：\*2005年におきた姉菌が判決を不服として控訴している。／\*痼癩にさわった天麩羅蕎麦をたべた。
- d. 場面を共有する物や場所でその対応物：\*サービスランチを注文した14卓をさっき布巾でふいた。／\*くいにげしたかつどんは出汁がききすぎていた。

以上のような、兼用表現を適用させたときに生じるふるまいのちがいの要因を説明する仮説として、現象の概念レベルでの成立メカニズムがことになっているということが考えられる。すなわち、兼用表現が使用できない類型は、メンタル・スペース理論の観点からみれば、ある対象をそれと密接に関連した別の対象がもつ属性をもちいて限定する、という二段階の指示をおこなっている。このとき、ふたつの対象をむすびつける社会的・心理的な関係性を語用論的コネクターという。一方、兼用表現が使用できる類型は、問題となる名詞がもつフレームの側面が述語によって活性化されるものと考えられる。このような類型では、兼用表現が使用できない類型にみられる二段階の指示はおこなっておらず、名詞がもつ値はひとつである。このとき前者のような二段階の指示をおこなうものを「換喩」。後者のような、一見換喩のようにみえるが二段階の指示をおこなっていないものを「換喩もどき」とよぶことにする（大田垣 2011 参照）。そして、このちがいを図示すれば次の図1 ようになる。



(図1：換喩と換喩もどきのちがい)

メンタル・スペース理論では、換喩を換喩によってあらわしあらわされるもの（厳密には指示し指示されるもの）との間に語用論的コネクターが生じることで、一方の属性をもちいて他方を指定することができる考える。このとき、換喩によって指示する事物をトリガー（上図 a の要素）、指示される事物をターゲット（上図 b の要素）という。一方、先行研究において換喩をどのようなモデルでとらえるかについてはいくつか意見があり、代表的なものとして Langacker (1993) の参照点構造モデルや Croft (1993) や西村の一連の研究（西村 2004、2008、西村・野矢 2013）における領域焦点化モデルがある。参照点構造モデルは、ある対象を限定したいときにその対象と関連した目印をつかってその対象を指定するという認知的な方策である。一方で、領域焦点化モデルでは、名詞のもつフレームの一部に述語によって焦点があてられる現象を換喩のメカニズムと考える。この2つの考えかたのうち参照点構造モデルは換喩を一方向性をもった現象ととらえる点においてメンタル・スペース理論による換喩のモデルにもなじむ。このモデルのちがいは、先の言語現象の記述的観察にみられた換喩（とよばれてきた諸表現）の2大別に対応している。参照点構造モデルは兼用表現が使用できない換喩表現に対応し、領域焦点化モデルは兼用表現が使用できる換喩表現（本稿でいう「換喩もどき」）に対応している。

このように、換喩における指示の考え方がメンタル・スペース的にみて純然たる換喩とみなせる類型と、西村のいう換喩（本稿でいう換喩もどき）とではおおくことになっている。メンタル・スペース的にみればあいの「指示」はフレーゲなどの従来の研究にみられる「リファレンス」のとらえかたである。これは名詞の指示を内包と外延（メンタル・スペース理論という役割と値に対応）から構成される集合としてとらえるモデルである。純然たる換喩は、従来の指示のモデルを語用論的コ

ネクターによって拡張することで説明が可能である。一方、西村が提唱する領域焦点化モデルにおける「指示」は Langacker がとなえるベースとプロファイルの関係におけるプロファイルに相当し、フレーム内の側面のどこに焦点があてられているかということが問題になる。しかし、このモデルで説明される「換喩」は従来換喩とよばれてきたものの特徴からはなれ、換喩の外延をいたずらにひろげてしまう。そこで、以下ではメンタル・スペース理論の観点からみて純粋に換喩とよべる類型と、そうではない換喩もどき（西村のいう領域焦点化モデルで説明できる類型）の言語的ふるまいがどのようにことなるかをのべ、それらをひとしなみにあつかうことができないことをのべる。

### 3. 換喩と換喩もどきの言語的なふるまいのちがい

換喩と換喩もどきの成立メカニズムについて、先にのべた仮説がなりたつとすれば、以下のような言語的なふるまいのちがいが存在することが予測できる。

(15) a. 述語のかかりかたのちがい

b. 疑問詞疑問文のふるまいのちがい

以下では、これらの換喩と換喩もどきの言語的なふるまいのちがいについて分析し、そこから考えられる両者の本質的なちがいについて考察する。

#### 3.1. 述語のかかりかたのちがい

換喩と換喩もどきの言語的なふるまいのちがいとして、述語のかかりかたのちがいがある。特に、何が言語表現としてあらわれていて、何があらわれていないかに注目すると、まず、メンタル・スペース理論からみて純粋な意味での換喩では、言語化されている名詞が属性となってターゲットを限定するために使用される。そして、述語はトリガーによって限定される潜在的な対象にかかる。たとえば、

(16) かつどんがくいにげした。

では、述語「くいにげした」は言語化された名詞「かつどん」が属性となって限定する潜在的な対象、すなわち「かつどんを注文した客」にかかる。

一方、換喩もどきでは、述語によって活性化される名詞がもつフレームの一側面は、目にみえるかたちで言語化されているわけではない。実際に言語表現としてわれわれの目にみえるのは、フレームの一側面のそれぞれに対応する述語であり、その述語群が当該の名詞のフレームを構成する属性としてパラダイムを形成する。

(17) 電話を {ひく／かける／きる}。

このように文のどの位置が「現象の成立に必要な属性」として言語化されている

のかという観点からみれば、換喩と換喩もどきにはおおきなちがいがあることがわかる。換喩の成立にかかわる「対象を指定する属性」は名詞として言語化されるのに対し、換喩もどきの成立にかかわる「属性（＝フレームの一側面）」は言語化されず、むしろ述語が名詞のフレームの内実を言語化している。つまり、いわゆる換喩成立の動機づけとしてよくいわれる「隣（近）接性」が言語形式として表現される位置が、換喩と換喩もどきとはことなっているのである。このちがいについて西村・野矢（2013）は後者を「動詞のメトニミー」とよんであらたな区別をおこなおうとしているが、筆者は換喩は名詞の位置に生じるものに限定されると考える。

### 3.2. 疑問詞疑問文のふるまいのちがい

換喩と換喩もどきの成立メカニズムのちがいから予測できる言語的なふるまいのちがいのふたつめとして、疑問詞疑問文のふるまいのちがいがあ。まず、換喩の特徴として、次にしめすように、ターゲットについて言及する疑問詞に対してトリガーをあらわす名詞でこたえられるという特徴がある。

(18) a. 誰がくいにげしましたか？

b. かつ井です。

一方、換喩もどきのばあいには、ターゲットについて言及する疑問詞に対してトリガーをあらわす名詞でこたえられない。たとえば、「洗濯機がまわっている」や「自転車をこぐ」といった「全体で部分をあらわす」とされる換喩もどきでは、瀬戸（1997）や西村（2004、2008）の考えにしたがえば、「洗濯機」で「洗濯機のバルセーター」、「自転車」で「自転車のペダル」をあらわしていることになる。しかし、次のような疑問詞疑問文をつかうことによって、名詞句が指示しているのは全体としての「洗濯機」や「自転車」であることが判断できる。すなわち換喩もどきでは、そもそも換喩によってあらわしあらわされるといわれてきた関係が換喩におけるトリガーとターゲットによる二段階の指示の関係にないのである。このとき、

(19) a. 何がまわっていますか？

b. 洗濯機がまわっています。

という問答は可能であるが、

(20) a. どこがまわっていますか？

b. \*洗濯機がまわっています。

は不自然なやりとりになる。このテストからわかるのは、もし「洗濯機がまわる」という表現における「洗濯機」が換喩による指示のずれによって「洗濯機のバルセーター」を指示しているなら、「どこ」という疑問詞をつかった疑問文で「洗濯



機です」という回答が可能なはずだがそうはならない、ということである。同様に、

(21) a. 何をこいでいますか？

b. 自転車をこいでいます。

は可能でも、

(22) a. どこをこいでいますか？

b. \*自転車をこいでいます。

という問答は不自然なものとなる。以上のような疑問詞疑問文をもちいたテストにより、「全体で部分」をあらわす換喩とよばれてきた類型は、名詞句の位置に生じ二段階の指示をおこなうという換喩の特性からははずれており、名詞句がもつ値の数はひとつであることがわかる。

次に、「組織で責任者をあらわす」類型についても同様に、疑問詞疑問文をつかったテストをおこなうことで、この類型が純粋な換喩ではないことが説明できる。たとえば厚生労働省のような「組織」のばあい、通常疑問詞として「どこ」が使用される。

(23) a. どこが米産牛肉の輸入停止を発表しましたか？

b. 厚生労働省です。

これに対し、もしこの類型が語用論的コネクターによって二段階の指示をおこない、「責任者」を指示しているとすれば次のような問答が可能なはずだが、実際は不可能である。

(24) a. 誰が米産牛肉の輸入停止を発表しましたか？

b. \*厚生労働省です。

この問答が不自然になる要因は、「誰」という疑問詞が特定の人物を回答として要求するのに対し、厚生労働省という組織をあらわす名詞が基本的に特定の人物を限定できないことにある<sup>(2)</sup>。ここでも、語用論的コネクターを介した指示の拡張はおこなわれず、名詞句がもつ値の数はひとつである。

### 3.3. 「カラ格」(三宅1996)をもちいたテスト

さて、ここまでの疑問文をもちいたテストで「全体で部分をあらわす」類型と「組織で責任者をあらわす」類型が換喩もどきであることをのべた。しかし、いわゆる「容器で中身をあらわす」類型ではこのテストが使用できない。なぜなら、ターゲットについて言及できる専用の疑問詞が存在しないからである。

(25) a. どこが沸騰していますか？

b. \*ヤカンです。

c. ?水です。

(25)のテストでは、(25c)の回答も不自然になってしまう。そもそも、「どこ」という疑問詞が全体と部分の関係の部分をとうことにはつかえても、容器と中身の関係のような空間的隣接関係の中身の部分についてとうことができないことが原因と考えられる。しかし、「容器で中身をあらわす」類型でも名詞句がもつ値の数がひとつであることをしめすテストが他にある。それは、三宅（1996）がしめした「～カラ…ヲ」形式をもちいたテストである。三宅（1996：157）によれば、「太郎がボトルから栓ををぬいた→太郎がボトルをぬいた」「太郎が黒板から落書きを消した→太郎が黒板を消した」などの統語的な「編入」の現象について「対格名詞句によって示される移動物が、その移動にとって典型的なものである場合、抽象化され統語構造においては具現化されなくてもよい場合がある」とする。このテストをつかうことで「容器で中身をあらわす」類型が二段階の指示をおこなっているかどうかをしらべることが可能である。たとえば、容器で中身をあらわす類型としてしばしばあげられるのは次のような例である。

- (26) a. ヤカンが沸騰する。  
b. 本棚を整理する。  
c. 水槽をいれかえる。

これらの例は瀬戸（1997）や西村の一連の研究によれば、「容器」で「中身」をあらわしている、ということになる。しかし、三宅（1996）で提示されたテストをもちいると、その関係が上記のような慣用的な用法にのみ成立し、次のような表現では成立しないことがわかる。

- (27) a. ヤカンからお茶をグラスにそそぐ→?ヤカンをグラスにそそぐ  
b. 古い本棚から本を新しい本棚にうつす→?古い本棚を新しい本棚にうつす  
c. 丸い水槽から金魚を四角い水槽にうつす→?丸い水槽を四角い水槽にうつす

このように、「容器が中身をあらわす」ようにみえる現象は「ヤカンが沸騰する」「本棚を整理する」「水槽をいれかえる」といった慣用的な表現にのみ成立し、あきらかに中身について言及しているはずの別の表現が不自然になる点からみて、二段階の指示は生じていないと考えることができる。すなわち、このばあいも名詞句解釈における問題となる名詞がもつ値はひとつということになる。

#### 4. 何が兼用表現の成立可否を支配しているか

さて、ここまで換喩もどきの指示性について、換喩と換喩もどきのちがいがから予

測される換喩もどきの言語的なふるまいについて分析をおこなった。ここからは、換喩もどきにおいて可能な兼用表現について、何がその成立可否を支配しているかについて考察する。

まず、先にしめしたとおり、純然たる換喩においては、兼用表現を使用することができない。これは、純然たる換喩においてはトリガーとなる名詞がもつ属性は、ターゲットの指定にのみ使用されるからである。

(28) ?くいにげしたかつ井は出汁がききすぎていた。

これに対し、換喩もどきでは名詞がもつフレームの側面に対応した述語を名詞にあたえることで兼用表現をつくることが可能である。

(29) 会社からかかってきた電話をとる。

しかし、おなじ名詞であっても、次のような表現は不自然となる。

(30) \*会社からかかってきた電話をひく

ここから、換喩もどきで可能な兼用表現の使用にも、ある種の制約があることがわかる。それは、名詞がもつフレームに「手順」のような時間軸が存在しているということである。たとえば、「電話」のフレームがもつ時間的順序を簡略化してしめすと次のようなものが考えられる。

(31) 電話をひく → 電話がかかってくる → 電話をとる

このフレームがもつ手順の存在により、「会社からかかってきた電話をとる」とは言えても、「会社からかかってきた電話をひく」とは言えないのである。いいかえれば、以上のような手順の制約に反しないかぎり、換喩もどきでは兼用表現をつかうことができる。

## 5. 「作家で作品」と「支配者で被支配者」の類型について

最後に、人名がトリガーとなる類型がのこされている。ひとつは「漱石をよむ」のような「作家で作品をあらわす」類型であり、もうひとつは「ブッシュがイラクを爆撃した」のような「支配者で被支配者をあらわす」類型である。まず、「作家で作品をあらわす」類型について考察する。この類型は、指示のありかたがこれまでの類型とくらべて複雑である。従来、この類型は典型的な換喩の一種とみなされてきたが、次のような兼用表現が可能であることからみて、換喩もどきの性質をそなえている。

(32) 明治の文豪である漱石を来月の読書会でよむ。

この文では、漱石の作家としての側面と作品としての側面が活性化されている。つまり、作家のフレームのなかには作品という側面もあわせてふくまれているとい

うことがわかる。これは、『漱石』という固有名詞が作家という側面をもっているから可能であり、それを喚起しにくい本名の『夏目金之助』では、上記のような解釈は不自然となる。

(33) 1867年に江戸牛込で生まれた夏目金之助を来月の読書会でよむ。

また次の、

(34) a. 明治の文豪である漱石はぶあつい。

b. 明治の文豪である漱石が床にころがっている。

c. 明治の文豪である漱石をやぶいてしまった。

のように、作家のフレームがもつ作品という側面から転じて物理的形態としてのその作家の本についてまで作家の側面と同時に言及しようとする、兼用表現は不自然なものになってしまう。これは、作家のフレームがもつ側面が作品までで、そこからさらに物理的形態としての本まではフレームの側面としてふくまないということである。あえて、作者という側面から作品という側面を介在して物理的形態としての本を指示するには語用論的コネクターによる換喩的な指示が必要になる。これは次の疑問詞疑問文が可能であることから、判断できる。

(35) a. ここにならんでいるなかでどれが一番ぶあついですか？／漱石です。

b. 床に何がころがっていますか？／漱石です。

c. 何をやぶいてしまったんですか？／漱石です。

ところで、

(36) このむずかしい漱石はぶあつい。

のような兼用表現は一見、問題となる作家の著作の物理的側面について言及しているにもかかわらず兼用表現が成立し、(34)のテストの反例になっているようにみえるがそうではない。なぜならこの表現が可能なのは、本来、物理的形態という側面をもたない「作家」のフレームが、作品という側面を媒介とすることで、「本」のフレームがもつ物理的形態という側面にまで言及できるようになっているからである。すなわち、作家のフレームと本のフレームを以下のように仮定するとして、

(37) a. 作家 [作家 — 言語作品]

b. 本 [言語作品 — 物理的形態]

言語作品という側面を媒介として作家と本のフレームが、

(38) [作家 — [言語作品] — 物理的形態]

のように融合<sup>(3)</sup>することで、作家の名前でその作家の作品をふくむ本の物理的形態にまで言及できるようになるのだが、このとき「むずかしい」や「ぶあつい」といった述語は、もはや「本」のフレームについてしか言及しない。これは、次の作

家の側面にあらためて言及しようとする表現が不自然なことから判断できる。

(39) ?このむずかしく、ぶあつい漱石は明治の文豪である。

以上のことから、これまで「作家で作品をあらわす」とされてきた類型は、第一義的には換喩もどきと認定できるが、条件によっては換喩としての特徴をみせる。

次に、「支配者で被支配者をあらわす」類型について考察する。このタイプの典型例として次のようなものが考えられる。

(40) ブッシュがイラクを爆撃した。

杉本(1999)によれば、この種の例ではアメリカ大統領であり米軍への統制権をもつ人物をあらわす固有名詞である「ブッシュ」に語用論的コネクターが生じて間接的に実際にイラクを爆撃した戦闘機を指示しているとされる。しかし、次の疑問詞疑問文によるテストからわかるように、この例は換喩ではない。

(41) a. 何がイラクを爆撃しましたか？

b. \*ブッシュです。

なぜなら、もし、固有名詞「ブッシュ」が爆撃機を間接的に指示しているならば、ターゲットめあての疑問詞疑問文にトリガーをあらわす名詞でこたえられるはずだが不可能であるからである。では、この種の例が換喩もどきであり、「ブッシュ」がもつ支配者というフレームに被支配者という側面がふくまれるかといえ、次の兼用表現が不可能であることからわかるように、そうではない。

(42) \*イラクを爆撃したブッシュが撃墜された。

したがって、この類型は名詞の指示の拡張(=換喩)や、領域焦点化(=換喩もどき)といった名詞句意味論の問題ではなく、使役構文に代表されるヴォイスの問題となる。ただ、この種の表現がもつ修辭性(e.g. 秀吉が大阪城をたてた)の源が何に由来するのかは、比喩研究の問題として別の課題となる。

## 6. 結論

本稿では次のことをのべた。

(43) a. 兼用表現によって、これまでひとしなみに「換喩」とよばれてきた言語表現は「換喩」と「換喩もどき」にわかれる。

b. 換喩ではトリガーからターゲットにまたがる二段階の指示がおこなわれ、明示的に言語化された名詞は潜在的なターゲットを限定する属性となり、述語はターゲットにかかる。一方、換喩もどきでは、名詞がもつ値はひとつで、その値がもつフレームの側面は述語によって言語化される。

c. 疑問詞疑問文をもちいたテストにおいて、換喩ではターゲットについて言

及する疑問詞に対してトリガーをあらわす名詞でこたえられる。一方、換喩もどきでは、ターゲットについて言及する疑問詞に対してトリガーをあらわす名詞でこたえられない（ゆえに換喩もどきにはトリガー／ターゲットの関係が成立していない）。

d. 「作家で作品をあらわす」類型は第一義的には換喩もどきである。

e. 「支配者で被支配者をあらわす」類型は換喩でも換喩もどきでもない。

以上のことから判断できるのは、本稿で指摘した「換喩もどき」は通常の名詞とおなじ指示性をもち、これをある種の換喩表現とみなして通常の名詞の用法と区別する必要はない、ということである。この点を捨象していたずらに換喩の外延をひろげることは、換喩が本来もつ修辞性や一方向性といった特徴をおおいかくしてしまうことになる。

#### 注

- (1) これらの例のうち「鍋をたべる」の例は、本来換喩によって名づけられたものがカテゴリー化して料理名として定着し、通常の名詞とおなじ記号的なふるまいをする、いわば「しんだ換喩」といえる例である。本稿では、この種の例は分析からはずしている。
- (2) 特定の人物に対するあだ名として使用するばあいは可能である。
- (3) この類型に生じるフレームの融合については Ruiz de Mendoza and Hernández (2001) でも指摘があるが、彼らはこの種の拡張をあくまでフレーム間の問題としてとらえており、作家の名前でその作家の物理的形態としての本に直接言及しようとするときに指示の拡張がおこるとは考えない点で、厳密性にかける。

#### 参考文献

- 大田垣 仁 (2011) 「換喩と個性性一名詞句単位の換喩における語用論的コネクターの存否からみた一」『待兼山論叢』45, 大阪大学文学会。
- 國廣哲彌 (1997) : 『理想の国語辞典』, 大修館書店。
- 佐藤信夫 (1978) : 『レトリック感覚—ことばは新しい視点をひらく—』, 講談社。
- 篠原俊吾 (2004) : 「換喩と形容表現」『レトリック連環』, 109-26, 成蹊大学文学部学会。
- 杉本孝司 (1999) : 「メトニミーの非指示的側面に関する覚え書き」『大阪外大英米研究』23, 91-8, 大阪外国語大学。
- 瀬戸賢一 (1997) : 『認識のレトリック』, 海鳴社。(瀬戸 1986 『レトリックの宇宙』, 海鳴社を改訂したもの)
- 田窪行則 (1992) : 「「かつどんが食い逃げをした」〈語用論的関数と同定原則〉」『言語』1992年6月号, 28-31, 大修館書店。
- 西村義樹 (2004) : 「換喩の言語学」『レトリック連環』, (『成蹊大学人文叢書』2), 85-108, 成蹊大学文学部学会編, 風間書房。
- (2008) : 「換喩の認知言語学」『ことばのダイナミズム』(成蹊大学アジア太平洋研

- 究センター叢書), 71-88, くろしお出版.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013):『言語学の教室 哲学者と学ぶ認知言語学』, 中公新書.
- 三宅知宏 (1996):「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110,143-68, 日本言語学会.
- Croft, W. (1993) The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies, *Cognitive Linguistics* 4-4, 335-370, Walter de Gruyter.
- Fauconnier, G. (1985): *Mental Spaces*, Cambridge University Press.
- (1997): *Mappings in Thought and Language*, Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980): *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago and London. (邦訳) G. レイコフ・M. ジョンソン (著), 渡辺昇一 (他訳) (1986):『レトリックと人生』大修館書店.
- Langacker, R. W. (1993): Reference-point constructions, *Cognitive Linguistics* 4-1, 1-38, Walter de Gruyter.
- Ruiz de Mendoza Ibáñez, F. J. and L. P. Hernández (2001): Metonymy and the grammar motivation, constraints and interaction, *Language & Communication* 21, 321-57.

#### 用例出典

青空文庫 (aozora.gr.jp): 太宰治『道化の華』(1935年)、『春の枯葉』(1946年)／寺田寅彦『先生への通信』(1910年)／夏目漱石『坊っちゃん』(1906年)／新潮文庫の100冊 (CD-ROM 版): 川端康成『雪国』(1935年)／藤原正彦『若き数学者のアメリカ』(1978年)／松本清張『点と線』(1957年)／三島由紀夫『金閣寺』(1956年)／ウェブサイト:『教えて! goo』(oshiete.goo.ne.jp)／『日経ビジネスオンライン』(business.nikkeibp.co.jp)／『日本経済新聞』(nikkei.co.jp)／『日本の佇まい』(k4.dion.ne.jp/~r231/house/sankaku.html)／『生島ヒロシの50歳からの健康上手』の例は国立国語研究所が限定公開している現代日本語書き言葉均衡コーパス『中納言』(chunagon.ninjal.ac.jp) をもちいて抽出した／その他: 森見登美彦『太陽の塔』(新潮文庫、2006年)

付記: 本稿は、日本語文法学会第10回大会 (2009年)、平成22年度大阪大学国語国文学会、『語文』94輯 (大阪大学国語国文学会、2010年)、および筆者の博士論文 (『日本語換喩表現の研究』、大阪大学、2012年) の第4章の内容の不透明な部分を修正し、あらたな知見をくわえて精緻化したものである。

(おおたがき・さとし 本学特任研究員)